

2020年2月29日(土)

老球の細道528号

2月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

前に乗っていたトヨペット新型コロナ「プレミオ」は存在感があまりなかったが、ウイルスの新型コロナがこれほど存在感を増すとは想定外だった。ここ数年想定外のことがたくさん起こり、その都度適切な判断を迫られる。まるで接戦を戦うベンチワークのようだ。大切なのは問題を自分で考えること、周囲に流されないこと。「危機を意識し想像せよ。考えることをやめるな。正しく恐れる正しさを知る」。当たり前の日常に早く戻ってほしい。

1・テレビから

◆「子どもたちは、コーチが自分をどのように見守っているか常に見ている。コーチの言動にどんな感情が込められているのか感じている。指導者の姿勢や愛情が伝われば子供たちにスポーツへの愛が生まれる。そして子供たち自身が夢中で取り組むようになれば、結果は自ずとついてくるもの」〈NHK・BS:奇跡のレッスン・ボクシング:ウラジニール・シン〉:ウズベキスタンをボクシング王国にした指導者の言葉。指導者の基本は競技に対する真摯な姿勢と選手に対する愛情、そしてスポーツ以外のことも考えていてくれるかということ。

2・読書から

◆「ある記録の壁は、それを超える可能性が認識されると超えられるものである」〈多木浩二著『スポーツを考える』ちくま新書〉:陸上100メートル9秒台の壁、マラソン2時間5分の壁、バスケットNBAの壁等。誰かがやれたことは自分もやれると思ってほしい。

◆「人間が今までにつくり出した第一級の文化は競争心が動機で生まれてはいない。ダビンチ、ニュートン、すべて好奇心から生まれる」〈遠山啓著『序列主義と競争原理』太郎次郎社〉:けた外れの選手を育成するには、未知なることをたくさん経験させること。なれ、ダレないように。常に変化で刺激を与える。あきらめたらおしまい。ワクワク、ドキドキ。

3・新聞から

◆「更衣室で、こう伝えた。二つの選択肢がある。誰かのせいにして言い訳をするか。“自分たちはまだまだ”と受け入れ、次のプロジェクトを始めるか」〈朝日:Rugby Life:エディター・ジョーンズ〉:W杯ラグビー決勝で負け表彰式でメダルをはずした敗軍の将。勝ちには不思議の勝ちあり、負けには不思議の負けなし。まだまだやるべきことがあるということ。

◆「負荷がかかるから歯車は回る。重さがあるから地面に立てる。大変だから、人生は面白い」〈朝日:加藤登紀子のひらり一言〉:人生の醍醐味の一つは努力の後の勝利(成功)。努力のレベルが大変であればなお喜びは大きい。そして「大変」は大きく変わること。

◆「上出来。それでいいよ。一つだけでもいいところがあれば充分だ」〈朝日:折々のことば・池波正太郎〉:約束の時間をきちんと守る人間は結婚相手に大丈夫と鬼平犯科帳の作者は友人に言う。時間を守るのは相手の時間を大切に思うからだ。時間厳守は誠意である。